

## 読者の皆様へ

Pure Land Life は、海外寺院檀信徒を対象とし浄土宗開教振興協会が発行している英文冊子です。

ご縁のある御寺院へのお参りと日々のお念仏への取り組みに役立てば幸いです。

浄土宗開教振興協会

### 記事大意和訳

#### 2025 年海外開教区・開教地よりのメッセージとレポート

##### ハワイ： 念仏を生きる - 開宗 851 年を内省し心新たに

ハワイ開教総監 石川 広宣

本来あらゆる一日、あらゆる瞬間は等しく貴重なものです。しかし、止まることなく月日は流れ、私たちは安易に時間の経過に慣れ、かつて心に刻まれた感動は徐々に薄れていきます。これは人間である以上自然なことです。儀式や記念日は正にこのためにあります。これらは私たちを一時留め、内省を呼び起こし、与えられた一瞬一瞬の価値を再発見させるのです。

浄土宗の宗祖法然上人は、念仏行にあたって三つの重要な態度を伝えています。一つ目は尋常行儀と言い、日常生活において称える通常の念仏です。二つ目は別時行儀と言い、特別に機会を設けて集中的に称える念仏です。三つ目は臨終行儀と言い、死の瞬間を迎える際の念仏です。法然上人はこの中で特に尋常行儀に重点を置き、「一返の念仏それ自体が大事であり、その一声は常に最期の念仏となるかもしれない」と説かれています。同時に法然上人は、特別な機会を設けて念仏することは私たちの身も心も、命の神聖さに対する意識をも新たにするとして別時行儀も奨励されています。私たちは、そうした心を新たにする瞬間を通じ、一つの呼吸も一返の念仏も量り知れない縁起から生まれる、と思いつくことができるのです。

この「身も心も新たに」の精神のもと、神奈川教区の僧侶の方々がハワイを訪れ、寛大にも昨年の開宗 851 年記念法要を支援下さいましたが、私たちにとって念仏への感謝の念を深める意義ある機会となりました。2025 年 10 月 26 日、私たちは「Yula Yula 的懺悔会」と「浄土宗開宗 851 年及びハワイ開教 131 周年記念法要」という二つの意義深い法要

を催す機会に恵まれました。神奈川教区長の夏見裕貴師と宮林雄彦師のお導きとハワイ・神奈川・宮城の僧侶方のサポートのもと、念仏に基づく感謝、内省と友情が生き生きと映し出される一日となりました。

午前中に行われた Yula Yula 的懺悔会は仏教における懺悔、すなわち自ら取り除くことのできない「貪瞋痴」の煩惱を背負う平凡な人間として行う、己の限界への真摯な自己内省に基づいています。薄暗く保たれた本堂では、念仏の聲が優しく響く中、LED の蠟燭が一本一本灯されました。堂内の薄闇はゆっくりと道を譲るかのようになり、温かくしっかりとした灯りに照らされていきます。この瞬間には、「どれほど私たち自身の闇が深けれど、阿弥陀仏はその無量の慈悲で私たちを慈しむ」という浄土宗の中心的な教えが鮮やかに示されていたと思います。参加者は静かに懺悔紙の文字をなぞると、それを受け取った僧侶が内陣で浄焚します。あのすべてが静止したような瞬間、「解放とは自分自身の努力や自力から生まれるのではない」と思い出させてくれました。むしろ、それは阿弥陀仏の慈悲深い願いを通じて受け取るものなのでしょう。「Yula Yula」という名称は、蠟燭の炎の優しいかすかな光の描写から生まれました。ただし、ユラユラという言葉にはそれに留まらず、儂く不安定ながら、阿弥陀仏の光に導かれ無量の縁により保たれている私たち自身の命の姿をも現されています。

午後の記念法要は、厳粛なる尊厳と共に執り行われました。法然上人の時代から今日まで途絶えることなく伝えられた念仏の流れを体現するかの如く、ハワイ諸島と日本より大勢の僧侶たちが一堂に会しました。双方の地域の代表者による焼香は、「仏法が権威や力をもってしてでなく、簡素で普遍的な南無阿弥陀仏の呼び声を通じ、海も言語も世代をも超え伝播した」ことを思い出させてくれました。夏見

教区長は挨拶の中で、浄土宗の教えをハワイへ伝えた先人の苦難と献身に触れられました。彼らの忍耐と信心は今日も私たちの命の霊性を支え続けています。記念法要は過去の追想のみならず、「謙虚さと感謝をもって念仏を次世代へ引き継ぐ」という私たちに共通した決心を新たにすることとなりました。法要後、僧侶と参詣者は食事と会話、そしてハワイ雅楽会の美しい演奏を通じて互いの友好を深めました。さらに佐々木玄洋師から、ハワイ浄土宗の例年の事業「鯉のぼりセレブレーション」サポートのために全長7メートルの鯉のぼりが寄贈されました。流れに飲まれず上流へと進む鯉の姿は、「自身の力でなく阿弥陀仏の慈悲の願いに支えられて進む私たちの旅の象徴でもある」ことを改めて思いました。

記念日とはたいてい主たる画期的な出来事に限られますが、昨年の開宗 851 年と開教 131 周年は前年の記念行事から間を置かず開催されました。この継続性から、ある重要なメッセージを学ぶことができます。仏教とは特別な日のみ実践されるものでなく、念仏を通じ、日々共にして生きるものである、ということです。未来を見据えて、私たちは「仏法に基づくコミュニティを育む」という自身の献身について心を新たにしました。それは伝統に根ざしかつ現代社会に開かれ、「なみあみだぶつ」の光に抱かれ、先人の智慧に導かれ、感謝と共にこの道を歩む者の集うサンガと言えます。

## カリフォルニア： 「おかげさまで」

### 北米開教総監 後根 定璽

浄土宗本院は、ロサンゼルス市リトルトーキョーの寺院にて 30 年以上宗教活動を行ってまいりました。しなしながら 2023 年春、近隣のスキッドロウ地域（スラム街）の治安悪化によりトーランス市の仮事務所に移り、檀信徒の多くが居住されているサウスベイ地域に移転地を求め、新たな物件の探索を続けています。早く無事に当院のご本尊阿弥陀如来が新しい本堂に祀られるよう念じております。移転事業の過渡的状況下の様々な困難の中にもかかわらず、檀

信徒の皆さまのご理解ご協力のおかげにより、当院も宗教活動を継続しております。この「おかげ」という表現に触れる度、私はいつも、ハワイで開教使を勤めていた若かりし頃に出会った婦人を思い出します。

昔、フローレンス・ハイランドさんという婦人がハワイ州ホノルルに住んでおり、彼女は大変な親日家でした。彼女の夫、ジョン・ハイランド提督はかつてアメリカ第 7 艦隊の最高指揮官でした。お二人は共に日本への深い感謝を有し、その歴史と文化に深い造詣をお持ちでした。ハイランド婦人は浄土宗寺庭婦人会初代会長の故佐藤治子氏の近い友人で、彼らは日米両国で長年にわたる友情を育みました。ハイランド婦人はとりわけ、簡素と静寂から成る日本の美学に惹かれていました。日本の美の重要な二つの概念「侘び」と「寂び」の違いを理解し、しばしばアメリカの学生にその意味を説いて聞かせました。

ハイランド提督が横須賀の海軍基地に配属されていた頃、婦人は独りで京都を旅され、事前に連絡して宇治の平等院を訪れました。ご存知のように、平等院は 1052 年に建立されました。鳳凰堂は極楽浄土を表すよう建築された国宝で、仏師定朝によって彫られた阿弥陀仏像が祀られています。今日では、平等院はユネスコ世界遺産として広く知られています。昼過ぎに平等院に到着すると、ハイランド婦人は本堂へ案内されました。案内してくれた僧侶に振り返り、こう言われたそうです。「しばらく一人にしていただけますか？」彼女は本尊阿弥陀如来に向かって静かに座り、本尊の穏やかなお顔を眺めたそうです。彼女を気かけ、案内した僧侶は物陰から何度か、彼女が大丈夫かどうか確認していました。1 時間が経ち、やがて 2 時間。3 時間後、まるで本尊の存在と一体になるかのように、彼女はまた静かに座っていました。僧侶が近寄り、言いました。「もうすぐ閉館します。日も暮れますので。」彼女はゆっくり立ち上がり、感謝に溢れた深いお辞儀をし、寺院を後にしました。

何年も後にハイランド婦人にホノルルで会った際、私は尋ねました。「なぜそんなに長い時間、平等院の阿弥陀さまを

「拝んでいたのですか？」彼女は微笑んで答えました。「あんなに穏やかな顔は西洋にはありません。私はあの阿弥陀さまの表情が真に意味するものを理解したかったのです。」別の機会に、彼女は私に言ったことがあります。「日本語で最も美しい言葉の一つは『おかげさまで』です。」日本の日常生活で実に自然に用いられるこの表現は、人に対してだけでなく、私たちを支えている見えない力、例えば神仏の加護・有情（生きとし生けるもの）・自然など、私たちに見える世界を超えて影響を及ぼすすべてのものへ感謝の意を表すものです。彼女はこの「おかげさまで」を **Thanks to whomever and whatever** と訳しました（意識：あらゆる人、あらゆるものに有難さを感じて）。彼女によれば、「西洋文化において感謝はしばしば人に対し表されるが、自然などの人間でない対象に感謝が向けられることは滅多にない」とのことです。彼女はこの東西の違いに、そして日本文化に反映されている精神性の深さに大きな意味を見出した、と言います。

浄土教の三つの重要経典の一つ、『観無量寿経』に「仏心とは大慈悲」とあります。このことは、「苦しむ衆生を摂り取り安穩を提供する」という仏の本願を示すもので、我が子をけっして見捨てず護る母親の心によく譬えられます。ハイランド婦人はこの大慈悲心を、平等院の阿弥陀如来の表情の中にご覧になっておられたのでしょうか。

**ブラジル： 娑婆訶 ～幸あれ、祝福あれ、成就あれ～**

**南米開教総監 佐々木 良法**

2025年6月、私たちは南米開教の歴史を顕彰し、またブラジルで4ヶ寺目となるクリチバ日伯寺を落慶するという勝縁に恵まれました。サンパウロ別院では大本山清浄華院御法主飯田実雄台下ご親修の開教70周年記念法要を、またクリチバ日伯寺では浄土宗宗務総長川中光教師お導師のもと落慶法要を勤めることができ、光栄の至りでした。おかげさまで国内の檀信徒、そして日本より浄土宗を代表する来賓や多くの浄土宗僧侶の方々をお迎えし、二つの法要は喜び溢れる祝祭となりました。

6月6日、サンパウロでの記念法要では飯田台下による先亡開教使のご回向において、特にブラジルでの浄土宗寺院創建に生涯を費やされた長谷川良信初代総監・佐々木陽明2代総監の尽力が顕彰されました。飯田台下はまた、この70年間、ブラジルの3ヶ寺の護持興隆に貢献された檀信徒を讃えられました。今回のお祝いにあたり、このように先亡の方々の尽力が顕彰されたことを私たちは大変有り難く思います。彼らの不断の努力なくして、70年にわたる教化活動の継続とクリチバ日伯寺という4番目の寺院建立はあり得ませんでした。

さて、開教70周年記念法要では、ブラジルにおける浄土宗の足跡とクリチバ日伯寺建立を祝い、飯田台下による特別揮毫が披露されました。参詣者が畏敬の念と共に見つめる中、まず飯田台下は静かに、しかし確固たる様子で「慈」と「悲」の二字をしたため、「慈」は友情、「悲」は思いやりを意味し、合わせて「慈悲」であると説明されました。浄土教において、「慈悲」は時空を超越しすべてのものに注がれる阿弥陀仏の大慈悲と捉えられます。70年後の今日の祝祭に私たちを導いた最初の根源的な事象に思いを馳せる時、台下のお言葉はこれ以上ない啓発となりました。それは正に、ブラジル最初の浄土宗寺院であるサンパウロ日伯寺にご本尊阿弥陀如来が祀られたことに他なりません。喜ばしいことも悲しいことも、この70年間すべてを見つめてこられたのはサンパウロの阿弥陀如来のみなのです。この事実を目を向ける時、私たちの感謝の念は新たなものとなります。幸いにもその後も教化活動拡充に至る道を歩めたことは阿弥陀仏のお導きであり、その加護なくしてこの度の70周年はあり得なかったでしょう。続いて、飯田台下はもう一つ、「娑婆訶（そわか）」と揮毫され、密教に多く見られる陀羅尼の末尾に添えられる聖なる語と説明されました。これは「幸あれ」「祝福あれ」「成就あれ」等を意味し、願いの成就を祈る言葉としてよく用いられます。「法然上人の教えがサンパウロ・マリンガ・イビウーナ・クリチバから広がり、ブラジル全土に念仏の音が響きわたらんことを！」飯田台下が「慈悲」と「娑婆訶」を揮毫されるお姿の内に、私たちの切なる願いが具現化されたかの

ように感じられました。

6月8日の早朝、クリチバで私たちは正にこの「慈悲」と「祝福」に恵まれたに違いありません。雨模様の朝が、お導師と稚児たちの行道が始まる直前、暖かな陽射しと共に突然晴天へと変わったのです。どんな言葉もこの時の気持ちを表すことはできません。太陽の慈しみのもと、新寺院建立を記念し建てられた3メートルほどの角塔婆に向かい、川中宗務総長が洒水の作法と共に仏天の加護を念じられました。庭儀式に続き、内装を終えたばかりでパラナ松の香りが溢れ、厳粛な雰囲気にも包まれた本堂に進まれ、川中宗務総長は本尊阿弥陀如来の開眼作法を勤められました。約200名の参詣者全員の念仏の声と共に、私たちの4番目の寺院にご本尊が迎えられた様子には心が揺り動かされました。落慶法要のご垂示で飯田台下は「娑婆訶」の言葉に触れ、この新たな寺院が多くの「幸福」「祝福」「成就」に恵まれるよう念じて下さいました。

2025年に勝縁によって迎えたこの二つの宗教的な集会を慈しむと共に、私たちはサンパウロ・マリンガ・イビウーナ・クリチバで今後より多くの人々が称名念仏に取り組みられるよう、努力を続ける所存です。サンパウロとクリチバの二つの記念法会を経験して、私たちに残ったのは謙虚な心持ちです。すなわち、これからの道のりに「幸福」「祝福」「成就」という仏天の加護が待っているか否かは、すべてお念仏に対する私たちの主体的な取り組みいかんである、ということだと思います。

## オーストラリア： 相互関係性（縁）

### オーストラリア開教地主事 ウィルソン 哲雄

阿弥陀さまへの共通の信仰に基づき集う方々の心には、阿弥陀寺の存在があります。ここでは年間の様々な行事を通じて、集まる方々を互いに結びつける機会があります。年間最初の行事は修正会で、2025年1月初旬に行われました。ブリスベンの1月は真夏で、気温は摂氏35°以上に達するので、お彼岸やお盆のように法要を野外で勤めること

ができません。その代わりに、野外に比べて涼しい阿弥陀寺の室内で勤めました。残念ながら広さの関係上人数を制限し、20名ほどのみが心地よく座り法要に参加することとなりました。法要後は、参詣者が一品ずつ持ち寄った軽食をいただきました。修正会に集うことを楽しみ、軽食を共にする中で、私たちは相互の、また阿弥陀さまとのつながりを意識します。私たちは互いにつながっており、私たちが共にあることで Jodoshu Buddhist Community of Australia (JBC) ができ上がるのです。

JBC はまた、その他の団体ともつながりを深めています。とりわけ、日本の阿弥陀仏信奉者の皆さまとは強いつながりがあり、彼らの力添えは阿弥陀寺の活動を支えています。昨年2月、元駐オーストラリア大使佐藤行雄氏と杉山俊明師の一行が阿弥陀寺を訪問されました。阿弥陀寺での法要の導師を勤めた杉山師は JBC メンバーと面会され、皆日本からの僧侶と会う機会を大変喜びました。杉山師はさらに木曜島とカウラまで赴き、日本人墓地をお参りされました。カウラへ向かう前、キャンベラで合流された佐藤氏と共に、私たちは初めて現駐オーストラリア大使の鈴木氏にお目にかかりました。杉山師率いる日本からの一団は、木曜島・カウラ双方で現地議会構成員や地域社会の代表者らに面会されました。この度、日本とオーストラリアの浄土宗コミュニティの絆が強まったことは、彼らの訪豪における顕著な成果の一つと思います。

私たちの活動はまた、他のコミュニティの方々とも結びついています。昨年中に2回、私は敬老施設の高齢者の方々にお話をする依頼を受けました。彼らは皆、加齢による様々な問題に直面しています。問題の一つは孤独です。皆家族から離れて生活し、共に施設に居住する仲間に慰めを見出しています。ほとんどの方が思考は活発で、周囲の世界への強い関心を維持しています。そのため、私は仏教の精神的価値について話すようお招きを受けたのです。彼らは熱心に耳を傾け、私の話が終わると大変思慮深い質問をされました。彼らに回答する中で、私は「異なる人種・宗教の人間同士が理解しようと互いに努力することにより、

彼らと私のつながりができ上がった」ことを大いに意識しました。そう理解することにより互いの尊敬と寛容が醸成され、世界平和の創造につながるものと思います。

月日が経過する中、阿弥陀寺では春秋のお彼岸とお盆が行われました。言うに及ばず、こうした行事はJBCのメンバー達が互いの絆と阿弥陀仏とのつながりを再認識する機会を与えてくれます。また、杉山師との2月の木曜島訪問に続き、私は5月に再び木曜島を訪れました。それは、墓標修繕事業中の日本人墓地で最後の墓標建立を祝福するため、ケアンズの日本国領事事務所に招かれてのことでした。墓標の修復はおおよそ5年間にわたる事業となりました。昨年、最後となる519基目の墓標が遂に建てられました。古く老朽化した墓標を新しいものに建て替えることを通じ、日本人真珠漁潜水夫達を祀る慰霊の地としての尊厳も同様に修復されたように感じました。時は過ぎたとはいえ、彼らは忘れ去られることはありませんでした。彼らは常に人々の心にあります。11月には、はるばる和歌山県串本町より、日本人墓地に祀られた彼らの祖先に敬意を払うため、アラフラ・シー・グループ（潜水夫遺族会）が木曜島を訪れました。たとえ祖先が亡くなったのが100年以上前とはいえ、子孫達はそのつながりを常に維持してきました。場所と時が隔たることなど問題ではありません。現代は過去に学び、未来を創造するのはその知恵であるのですから、一つの世代と次の世代間の相互の絆は常に存在します。

現代の私たちは祖先の恩恵に与っています。彼らは阿弥陀仏の慈悲の光に照らされて人生を歩み、この光を私たちに伝えました。そのおかげで、未来は守られています。そのお返しに、私たちはこの光を子孫に伝えます。過去・現在・未来はすべて相互に結び付いています - 今の私たちがそうであるように。

## フランス： 仏教徒の懺悔～ドイツでの帰敬式～

フランス開教地主事 高僧 光隆

2007年、故真野龍海台下に遠路渡航いただき開催となった記念講話会と共にフランスの Jodo Shu European Buddhism Center (JEBC) が発足して以来、20年を数えようとしています。この場をお借りして、日本浄土宗教師の皆さま、フランスの檀信徒各位のご理解ご協力に感謝申し上げます。とりわけ、故真野台下並びに故佐々木陽明南米総監より賜ったご協力ご鞭撻はけっして忘れられることはありません。フランスでの活動に加えて、2024年にドイツで浄土仏教協会が設立され、フランク光然ビュトゲン氏を中心に活動しています。ビュトゲン氏はドイツ語・日本語・英語等を含めて4、5ヶ国語に堪能ですが、ドイツ・ベルギー・オランダの3ヶ国が接する国境近くで生まれたため、彼にとってオーストリアとスイス一帯の言葉は日本語という方言のようなものとのことです。

さて昨年9月下旬、JEBCの橋本副代表にも同行いただき、ドイツ浄土仏教協会が企画した帰敬式のためにドイツを訪れました。会場はボン市内のジムの一室で、オーナーがドイツ協会の活動に共鳴され無償で提供下さいました。受者に加えスペイン・イタリア・ミュンヘンから多くのメンバーが駆け付け、またオンラインでの参加者もありました。私はドイツ語ができないので、開教使補フランク光然ビュトゲン氏が通訳として補助してくれました。

キリスト教の告解や懺悔が「神」の許しを請うよう信者を戒める一方、帰敬式における仏教徒の懺悔は、六道輪廻に捕らわれる私たち自身の「業」の浄化が特徴です。懺悔会では、私たちは一人仏陀に直面し、貪り・怒り・愚かさにより積み重ねた過去よりの悪業を懺悔します。ここには、釈尊を含め7人の過去仏が戒について共通して説かれ、仏教の基本的な教えの一つである「自浄其意」の教えが表されています。平穏な静寂の中、受者は仏像に直面します。仏陀との間の深遠な親密性は、日常生活では馴染みのない感情を呼び起こします。この懺悔を通じた帰敬式の感動と共に、受者が今後、彼自身の仏道を歩むよう念じています。

懺悔の後、戒師の私より帰依三宝（ブツダ・ダルマ・サンガ）の儀式を受けました。

戒師として私は、14歳の時に浄土宗の東京の大本山である増上寺で体験した得度式の話をしていただきました。戒師は故椎尾弁匡台下で、私のような子どもを含む受者全員に優しく話して下さったことを今も思い出します。自分の帰敬式の思い出を語りながら、私は「仏法を伝える」ということに敬虔な気持ちに打たれました。日常生活の中で、私たちは皆、喜び、悲しみ、さらには痛みを伴うことを経験し続けるものです。浄土教徒として、私たちはそれらをありのまま受け入れ、毎日お念仏を称え、そこから育まれる感謝の心を胸に人生を慈しむよう導かれています。

今回自ら戒師を務めたことは、私にとって心を新たにすることができた経験でした。今後も JEBC の活動を発展させ、仏教を紹介し、ヨーロッパ諸国のお念仏仲間のつながりを深めていきたいと思っています。皆さまのご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます。

### 浄土宗開教寺院からメンバーの紹介

#### ハワイ： エドウィン・セラ／ラハイナ浄土院

ラハイナ浄土院の最初の思い出は 1963 年に遡ります。その当時、寺院はストライキ中の砂糖耕地労働者に食事を提供する炊き出しの場で、父もそこに集った労働者の一人でした。その後数十年にわたり、両親は私とラハイナ浄土院をつなぐ絆そのものでした。両親は献身的なメンバーで、積極的に寺院のサービスや活動に参加しており、寺院は人々を社会的に、文化的に、かつ精神的に結びつける場所でした。とりわけ夏のお盆法要は、コミュニティの人々すべてにとって毎年楽しい思い出が創造される祝祭でした。寺院のためにお寿司を用意するため、朝の 3 時から起きていた母の姿を思い出します。

若い頃、両親がそうであったようにラハイナ浄土院に献身

的であったか？私はまったくあてはまりません。しかし、彼らはけっして寺院のサービスに参加するよう私に強いるようなことはありませんでした。ただ、両親と原先生は、常に寺院のパーティと食事の機会に誘ってくれました。私が定期的に月例サービスに参加するようになるのは父が亡くなってから、母を寺院へ送る運転手を務めるようになってからのことです。こうして寺院との関係が深まった今日、私は仏教を学び、それを人生の範として受け入れています。不運にも、私たちの寺院は 2023 年 8 月のラハイナ火事で焼失しました。しかし私たちは、かつてラハイナ浄土院を建立した先人を顕彰する精神と共に、必ずや寺院を再興するでしょう。

#### カリフォルニア： アヤノ・イチダ／北米開教本院

カリフォルニア州ロサンゼルス北米本院メンバーとして、皆さまにご挨拶を共有することのできるこの機会に心より感謝いたします。私は弁護士で、南カリフォルニア大学の法学客員教授も務めています。長年にわたり、寺院の法要や後根先生・田中先生の法話に触れて、私の浄土宗の教えへの理解は徐々に深まっていったように感じます。法然上人の人生や慈悲の教えに触れることは、より浄土教のエッセンスを感謝できるよう助けてくれたと思います。単なる伝統としてだけでなく、称名念仏という行への感謝と信頼に根差した人生の道として、浄土宗の教えに近づくことができたと感じます。

それに加えて、私は従兄である長野の浄土宗寺院の笠井雅裕師（元ハワイ開教使）からも教えを受けることができ、大変幸運に思います。彼のおかげで、訪日の折には善光寺大本願や彼の寺院を含めいくつかの浄土宗寺院を訪れることができました。こうした寺院の聖なる空間である境内を歩き、その歴史を学ぶことは、私が浄土宗の伝統と精神へのより深いつながりを感じ、またその教えがどのように世代を超え意味をもたらしているかを顧みる機会を与えてくれました。こうした機会を得られたことへの感謝を胸に、これからも浄土宗のコミュニティと共に私自身のお念仏に取り組むことを楽しみにしています。

## ブラジル： アキラ・ヨシイ／クリチバ日伯寺

この度クリチバ日伯寺の護持会長に任命されたことを光栄に思います。また 2026 年 3 月には、満開の桜に彩られた東京の増上寺を見学する機会に恵まれました。増上寺のいくつもの聖なる空間に足を踏み入ると、日本の伝統に歓迎されたような気持ちに打たれました。我が家では「正直であれ、勤勉であれ」という実に日本的な伝統が確固として根付いており、私はその薫陶を受けて育ちました。その伝統のせい、私が薦めも説得もしないのに三人の子どもたちは皆、自発的に日本へ留学しました。今も、ブラジルでの彼らの現代的な生活様式の奥に日本の伝統を垣間見る度に驚かされています。

私と日伯寺の関係は昔のある夏、先祖の冥福を祈るためにカルロポリスの灯籠流しに参加したことに始まります。おそらくマリンガ日伯寺の故鹿森先生によるものと思いますが、その時が称名念仏に触れた最初の日伯寺でした。私たち家族はクリチバに住んで約 50 年になりますが、あの念仏経験の思い出は消えることはありませんでした。そして、当初は友人として知り合った大江田先生家族との友情が深まるごとにクリチバ日伯寺の集まりにも参加するようになりました。2018 年の五重相伝、2025 年の落慶法要、そしてとりわけ 2024 年の息子デニスの仏式結婚式は忘れられません。振り返れば、人生の進行に伴い、クリチバ日伯寺は私たち家族の故郷のような場所へとなっています。護持会長として、仲間の護持会員たちも同じように感じていただける寺院環境作りに最善を尽くしたいと思います。

## オーストラリア： ヨシノ・ピアソン／阿弥陀寺

私の父が菩提寺やお墓を大事にする人でしたので、私は自然に読経や法話を聞くことを楽しむようになりました。父が幼い私に仏教に親しむ機会を与えてくれたことを感謝しています。私がより真剣に仏教を学ぼうと駆り立てられたきっかけは義兄の死です。義兄の臨終の様子を眼前にしたことで、私は生と死の意味について考えさせられました。最初に阿弥陀寺のドアをノックした時、私は名前ぐらいし

か知らなかったジェイムズ・ウィルソン師の導きを求める決心をしていました。

実際にこの最初の阿弥陀寺訪問から、私の人生観は変わりました。まず、月例の写経会への参加から阿弥陀寺との関係が始まりました。様々な活動に参加する中で、とりわけ昨年は木曜島を訪れる機会に恵まれました。日本から移民した真珠漁潜水夫の方々のことを学び、彼らの祀られる墓地での追悼法要に参加したことは、私にとって圧倒されるような経験でした。今や私にとって、阿弥陀寺での集まりのすべてが他の参詣者と通じ合い、共に仏教を学ぶ機会となっています。また阿弥陀寺のおかげで、私はオーストリアにいても先祖を供養する場が与えられていることを有難く思います。ウィルソン先生には感謝しかありません。

## ヨーロッパ： アンドレアス・シクレ／欧州仏教センター

私は南ドイツに住んでおり、Covid-19 パンデミックが拡大しロックダウンが始まったばかりの 2020 年に浄土宗のグループに加わりました。それまでにはしばらく仏教に触れてはいたのですが、私が真に心地よさを感じる行に出会っていませんでした。ドイツにあるチベット仏教や上座部仏教、禅のグループに接触した後に浄土宗ヨーロッパ仏教センターのウェブサイトを見つけ、フランク・光然・ビュトゲン氏に連絡しました。ビュトゲン氏によれば、私はドイツから同センターに最初に加わった何名かのメンバーの一人だそうです。毎月の念仏会やその他の活動への参加を始め、すぐ、「ついに自分に合った宗教的行を見つけることができた」と感じました。

そして 2021 年 10 月、私は正式に三宝と浄土宗の教えへの帰依を誓い、ヨーロッパで帰敬式を受けた最初のドイツ人となる榮譽を受けました。日々の念仏は私の心を落ち着かせ、日常に平穏なひと時をもたらしてくれます。将来の私の夢はいつか日本を旅行し、浄土宗の寺院で念仏会に参加することです。

## 裏表紙 浄土宗の紹介： 宗歌『月かけ』

月かけの いたらぬ里は なけれども ながむる人の 心にぞ すむ

(月光の届かぬところはどこにもありませんが、その美しさは自ら月を眺める人の心の中にこそあるのです)

『月かけ』は浄土宗の宗歌で、法然上人の詠まれた詩が歌詞となっており、漏らすことなくどの家の屋根も照らしている月明りをモチーフに、誰にでも注がれている阿弥陀仏の本願が詠まれています。しかし、外に出て眺めねば月明りを味わうことができないように、阿弥陀仏の慈悲の光も求めねばその恩恵に与ることはありません。日本語では、「道理に明るい・暗い」など、人の性質を表すのにしばしば明暗の概念が使われます。「(月の)光」は「南無阿弥陀仏と称える誰をも極楽に迎える」という阿弥陀仏の本願、その慈悲の存在を曇らせる「闇」は私たちの煩惱によって造られる障りと捉えることができます。

しかし、砂漠や山、海のように電灯のない場所に上がる月がより鮮やかなように、闇が深いほど月も一層輝いて見えるものです。私たちの心を曇らせる闇も深いからこそ、阿弥陀仏の慈悲の光はより一層輝くと言えます。法然上人はこのことを「天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、このたび弥陀の本願にあう事を」と言われています。宗歌『月かけ』を歌う時、私たちは常に「外に出て、月を眺めよ」、すなわち「自ら称えよ」と励まされます。そして、阿弥陀仏の本願は闇夜を照らす月光の如く、一つ一つの念仏の声を照らします。私たちの心を照らす灯りは常に真心の念仏の声と共にあるのです。

浄土宗海外開教区・開教地

### Hawaii Council of Jodo Missions

Bishop Kosen Ishikawa ハワイ開教区 総監：石川 広宣

Tel: 1-808-949-3995 Email: [jodobulletin@gmail.com](mailto:jodobulletin@gmail.com) <http://hawaiijodo.net>

### Jodoshu North America Buddhist Missions

Bishop Joji Atone 北米開教区 総監：後根 定璽

Tel: 1-213-346-9666 Email: [info@jodoshuna.org](mailto:info@jodoshuna.org)  
<http://jodoshuna.org/> <http://english.jodoshuna.org/>

### Jodo Shu South America Missions

Bishop Ryoho Sasaki 南米開教区 総監：佐々木 良法

Tel: 55-11-3976-5771 Email: [nippakuji@hotmail.com](mailto:nippakuji@hotmail.com)

### Jodo Shu Buddhist Community of Australia, Inc.

Rev. James Tetsuyu Wilson オーストラリア開教地 主事：ウィルソン 哲雄

Tel: 61-7-3366-3300 Email: [jodoshu\\_aust@yahoo.co.jp](mailto:jodoshu_aust@yahoo.co.jp) <http://jodoshu-australia.org/>

### Jodo Shu European Buddhism Center

Rev. Koryu Koso フランス開教地 主事：高僧 光隆

Tel: 33-(0)2-32-67-70-95 Email: [koso.mitsutaka@jodoshu.eu](mailto:koso.mitsutaka@jodoshu.eu) <http://jodoeurope.org>

編集・発行 浄土宗開教振興協会 東京都港区芝公園 4-7-4 (03) 3436-3351  
Email: [kaikyo-info@jodo.or.jp](mailto:kaikyo-info@jodo.or.jp)  
<http://kaikyonet.jodo.or.jp/> (日本語サイト)

表紙写真

上： クリチバ日伯寺落慶法要 (クリチバ/ブラジル)  
下左より： Yula Yula 的懺悔会 (ホノルル/ハワイ)、盆・施餓鬼法要 (ロサンゼルス/カリフォルニア)  
敬老施設での法話 (ブリスベン/オーストラリア)、ドイツでの帰敬式 (ボン/ドイツ)